

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒 207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
<https://tohoku-saiko.jp/>
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-C reate , TOHOKU!

2 0 2 5 年（ 令 和 7 年 ） 1 2 月 1 6 日 火 曜 日

無料

第163号

毎月発行

発行 2025 年（令和 7 年）12 月 16 日 火曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ。72 歳の新人映像作家兼プロデューサー兼作家。趣味は古代史・縄文文化研究。現在、埋もれた歴史を掘り起こす歴史書籍増大の執筆開始。また、企業価値増大と IPO サポートを専門とする会社を今年 4 月に創業。電子新聞『東北再興』の発行責任者兼編集者兼記者でもある。



今年1年の東北を振り返る

2月-大船渡火事、春-海に異変、5月-米価格暴騰、7月-大谷二刀流復活、夏以降-熊出没増、10・11月-大谷と佐々木大活躍、12月-八戸の大地震

まだ半月ほど残っているが、ここでのいろいろな出来事があった東北の今年一年を振り返り、思い起こしてみようと思う。

＊ 一月、二月中旬までは大きな事件もなく、無難に一年をスタートした。

岩手県大船渡で突如山火事が発生し、広範囲にわたって燃え広がり、しかもなかなか鎮火しなかった。鎮火が宣言されたのは四月七日で、超長期に亘る山火事となった。火事が広がったのは、「飛び火があちこちで発生したためとされた。

＊ 春頃からは、東北を取



米大リーグ・ブルージェイズとのワールドシリーズ第3 戦の7 回、この試合2 本塁打目となる同点ソロを放ちポーズをとるドジャース・大谷翔平＝27 日、ロサンゼルス（共同）



佐々木朗希のダイナミックな投球フォーム・・・Yahoo ニュース10/6 より

り巻く海に異変が報告された。「磯焼け現象」といって、磯の浅海に海藻の生えない場所があちこちに発生した。温暖化によるものと言われたが、後々問題となる魚の異変につながる前兆となった。

＊ それから、昨年六月あたりから始まった米価格の高騰だが、今年三月から五月にピークとなり、昨年前半の倍以上の価格となり、全国で大騒ぎとなった。

＊ 最近米離れで米消費が減少が続いていたところであつたが、安い米を求めて行列が出来たり、必死に米を求める人々が出たり大変だった。半世紀前のオイルショック時のトイレットペーパー騒ぎのようだった。

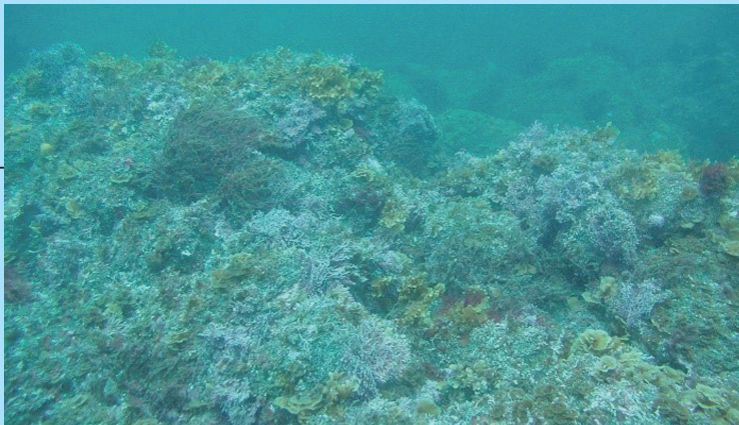
＊ 六月十七日には六百六十三日ぶりに大谷選手が投手として投げて「二刀流」が復活した。

＊ 今年に入ってからツキノワグマの出没件数が上昇

している。直近データでは、全国の死者数が十三人となり、そのうち約八割が東北だった。



対岸から山火事を見つめる・・・岩手日報より



磯焼け・・・水産庁より



地震

ショッピングセンター壁が崩落 八戸で6強

佐々木朗希のダイナミックな投球フォーム・・・Yahoo ニュース10/6 より

秋田県や岩手県では、県庁所在地にも熊が出没し、あまりの件数に自衛隊の出動であった。

通常なら、十二月になれば冬眠するのだが、冬眠しない熊の出没があつて心配である。

＊ めでたいニュースとしては、十月と十一月にかけて、MLBドジャースの大谷選手の三年連続の MVP があり、ドジャースのワールドシリーズ優勝があり、佐々木朗希投手も急遽リリーフ投手として「復活」し大活躍したことがあつた。世界に誇れる選手たちである。

＊ このまま無事に東北の一年が過ぎて行くのかと安心していたら八日に青森県八戸で震度六強の地震発生。余震がまだ続いている。

＊ 一年の締めくくりとしては残念なニュースだが、死者が出ていないのを不幸中の幸いでしょう。

これは野生動物による無差別殺人だ!…熊問題 その②

ほんとうは誰も原因が分かっていないのではないか? 専門家も猟師も…



クマ出没情報

雪の中を徘徊する熊
(2025.12.13・・・秋田魁新報より)



冬眠中のはずだったのに、巣穴でクマが向かってきた
(日経新聞 2019.12.7より)

従来の熊の常識が大変化

- ① 熊は必ず冬眠するのではなく、エサがあれば冬眠しない
- ② 人間の食べ物のうまさを知った熊は、元の山のエサだけの生活には戻れない
- ③ 草食中心の食事から肉の味を覚えた熊がたくさん出現している（人にで飼われている犬や猫もエサだと思っている）
- ④ 人間の暮らすエリアから山に戻れない熊が出現している
- ⑤ それどころか人間の住むエリアが熊の縄張りだと思っているかもしれない可能性さえある
- ⑥ 冬眠の場所が山から人が住まなくなった廃屋になる可能性がある

「野生動物による無差別殺人」である!

今月五日現在の「熊被害」のうち、被害者人数が二百三十名、うち死者数十三名というとてもない被害となっている。

死者数十三名の内訳は、岩手県五名、秋田県四名、北海道二名、宮城県一名、長野県一名となっている。東北が八割弱を占める。圧倒的に多い。

もしこれが関東地方だったら、「騒ぎ」は今よりはるかにすごいものになっているだろう。

しかし、よく考えてもみて欲しい。これは「野生動物による無差別殺人」なのである。明確な理由も原因も分からない殺人なのだ。しかも、今も有効な対策

が打てずにいて、「殺人予備群」が住宅街をうろつき、冬になっても被害は現在も継続中なのである。

こんなことは前代未聞であり、動物保護団体のクレーム問題どころの話ではない。無差別殺人を許す動物保護団体など論外である。

すでに、一過性の問題として忘れてはならないレベルをはるかに超えている。

「熊の多様化」に追いつけない熊専門家?

もう十二月に入ったというのに、そして東北では雪が降りあちこちに積もっているというのに、それでも熊が出没しているというニュースが頻繁に出現する。むしろ、こうしたニュースがめずらしくもなくなってきたのがニュースなのか

もしれないという状況が続いている。

冬には熊は冬眠しているはずだというこれまでの「常識」が通用しなくなっている。

こうした状況を前にして、さまざまな熊研究の専門家がメディアに登場して、最近の新たな熊動向を解説するのであるが、今ひとつピンと来ない。この事態を的確に説明できているとは思えない。

次から次へと出現する新たな現象を後追い解説しているようにしか見えない。

実際のところは、これまでの熊に関する常識が通用しなくなっているのではないか?

専門家さえも、こうした状況に戸惑っていて自信を失っているのではないのか?

それほどまでに、今年の熊、特に東北に住む熊が、短期間のうちに「多様化」して、従来の常識範囲を超えてしまっているのではないだろうか?

だとしたら、これからどうしたらよいのだろうか?

最近の熊の動向に戸惑っているのは熊研究の専門家だけではないようだ。

全国でクマによる人的被害が過去最多を記録し、人里や市街地での目撃情報が続出し、冬眠期に入っても被害が相次ぐこの異常事態について、駆除を行っている猟友会のメンバーからも

「人間を見ても逃げない」、「雪が降っているのに人里に來るのは変」だと違和感を覚えているという。

さらに、長年実際に熊と対峙し、熊を熟知している「マタギ」も戸惑っているようだ。

ある「マタギ」が現状について正直に語っているが、それは想像をはるかに超えるものである。

まず、過去の事例と比較して、今年の被害状況は「異常な現象」だと捉えているようだ。

数年前に秋田で起きた連続人身被害があったが、それは「特定の個体とそのグループ」によるものだったが、今年に限っては「各地で一斉に人を餌と認識している」とまで言う。

さらに、「犬と猫も食べらる。これも異常な現象だ」と思う。

全国のクマが人を襲うなんて、SFのような世界

としか思えず、クマの生態に異変が起きている可能性を示唆している。

熊対策のむずかしさ

さらにそのマタギは、クマの出没状況は地域によって全く異なるため、「一概には言えないので、これはもう永遠の課題だ」と、統一的な対策の難しさも語っているのだ。

また、クマの生息数を「正確に捉えているところは、実際はない」という認識も示したが、今後の熊対策の基本である生息数が分からないというのは、そもそも的確な対策も打てないのでないかと不安になる。

このマタギによると、クマは生息域によって「山にだけ生息するクマ」、「山と里を行ったり来たりするクマ」、そして「街中にだけいるクマ（アーバンベア）」の三種類に分かれているという。普段狩猟する山奥のクマは既に冬眠に入っているが、人里に出てくるクマは異なる生態を持つ。クマが市街地に続出する背景には、山奥の強い個体との競争に敗れた弱い個体が下がってきているという実感がマタギの側にもあるという。

また「強い個体は山の奥で王様のように振る舞っている」とし、弾かれて下がってきたのは「メスクマであるとか若いオスなど、やはりあまり強くない個体」だと指摘する。特にメスクマが街中で子どもを産んで一年間生活してしまうと、その子どもは「山を知らないクマになっていく」。これが俗にいうアーバンベア

（都市グマ）であり、「人間依存型で、要は勝手にクマの方が人間との共生社会を構築している」と現状を分析している。

冬眠しない熊が・・・

さらに恐ろしいのは「冬眠しない熊」の出現である。すでにその兆候が出現している。十二月半ばまでにはほとんどの熊が冬眠するというのがこれまでの常識だったが、この常識も破られてしまったら人間はどうすればいいのか?

前号で指摘したように、人間の食べ物の味を知ったアーバンベア（都市グマ）が、米蔵を襲う場面、民家に入って冷蔵庫を漁る場面等、そこで人と出くわしたら、人の逃げ場はないのだ。

東北水産業の未来 その④

東北は世界に先駆けての養殖産業を仕掛けられるか

すでに養殖には馴染みがない「サンマの養殖」に成功している

今後日本近海の魚の異変は続くだろう

これまで、日本の近海の魚の異変を三回にわたって取り上げた。

漁業従事者にとってはかなりの異変であり、さぞや苦勞していると思うが、異変はまだ始まったばかりで、この程度で終わると思えないし、今後も続くだろうし、以前に戻るといことはまったく考えにくい状況である。

かといって、漁業従事者も漁業から完全撤退という選択肢はありえないと思うので、何らかの対策を考える必要がある。

温暖化を回避する養殖業が伸びない日本

異変の一番大きな原因は地球温暖化と考えられる。それで、温暖化の影響が

なるべく少ない漁業としての養殖産業が今後は有望であると見ているだろう。

わが東北でもその流れに乗って、いや世界最先端の魚の養殖産業を目指し、どんどん開拓していつかはどうかと思うのだが、国内では予想外にも、養殖業が伸びていない現実がある。

推測される原因のひとつには、圧倒的多数を占める零細の個人漁業者にはかなりの投資が求められる養殖業は非常にむずかしいということもあると考えられる。



マルハニチロが8月に水揚げした養殖サンマ
・・・日経新聞 2025.9.9)

やはり、事業会社が参入しないと養殖業は無理だと思ふ。

とはいえ、足元の養殖業者の状況もあまり芳しくないのである。

今年一月から八月までの水産養殖業における倒産・休業業・解散件数は二十件

に上ったことが判明している。この数はすでに前年の十九件を上回っており、過去十年間で最多となる可能性が高いと見込まれている。したがって、温暖化に強い

養殖業だからという理由だけで当事業に参入するのは無謀であり、樂觀視は出来ず、かなりの工夫が求められる。

世界は養殖、日本は天然にこだわり生産量激減

他方、世界の漁業に目を向けると、世界の漁業生産量は過去最多を更新する一方、日本はピーク時の三分の一以下に落ち込んでいる状況がある。

なかでも、天然魚は世界的に頭打ちで、養殖が主流へと転換するなか、日本はまだ天然志向が根強く、

養殖生産は縮小を続けているのである。

二〇二三年の世界の漁業・養殖業の生産量は、二億二六九七万トンと最多記録を更新した。このうち、天然物の生産量は九〇八〇万トンと一九八〇年代後半以降、横

ばい傾向だが、養殖物は一億三六一七万トンと増加傾向である。

対する日本の養殖魚生産は、天然魚の四分の一以下と圧倒的に少なく、近年は減少傾向にあり、逆に中国やインドネシア、インドな

どを中心に活発な生産が続いている。天然魚生産が伸び悩む中で、貴重な動物性タンパク質の供給源となっ

ており、今後も養殖生産は天然魚とは対照的に増え続けると思われる。

天然魚資源管理はますます厳しくなる

国連食糧農業機関の報告によれば世界の天然魚の適正レベルが一九七四年以降下がり続けており、過剰に

漁獲されている状態の資源は十%から三十五%まで増加していると警告している。

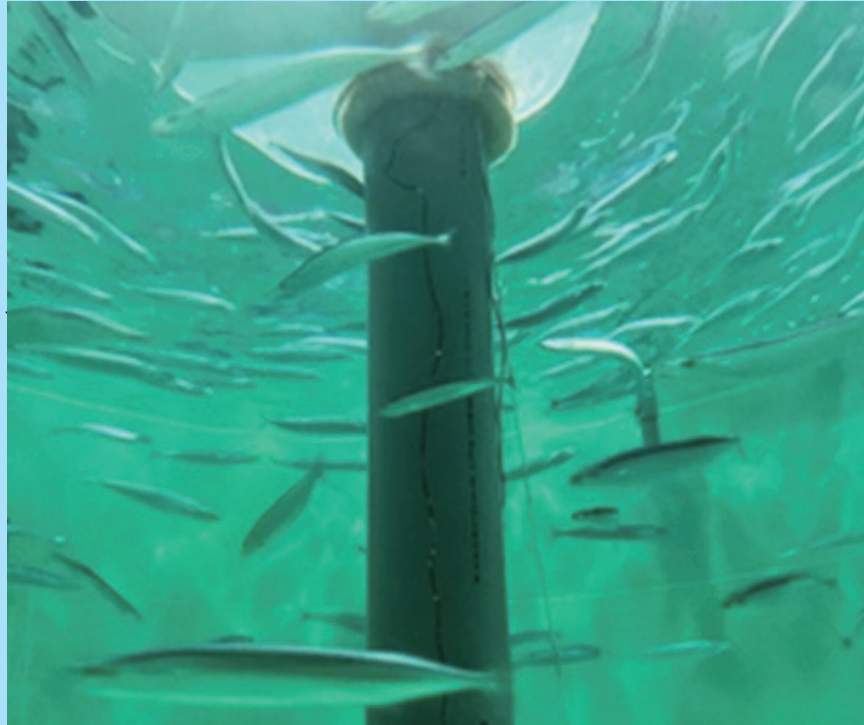
つまり、限りある天然魚の乱獲の防止により、世界的に水産資源の持続的利用への必要性が高まっているのである。

養殖には馴染みのないサンマの養殖に成功

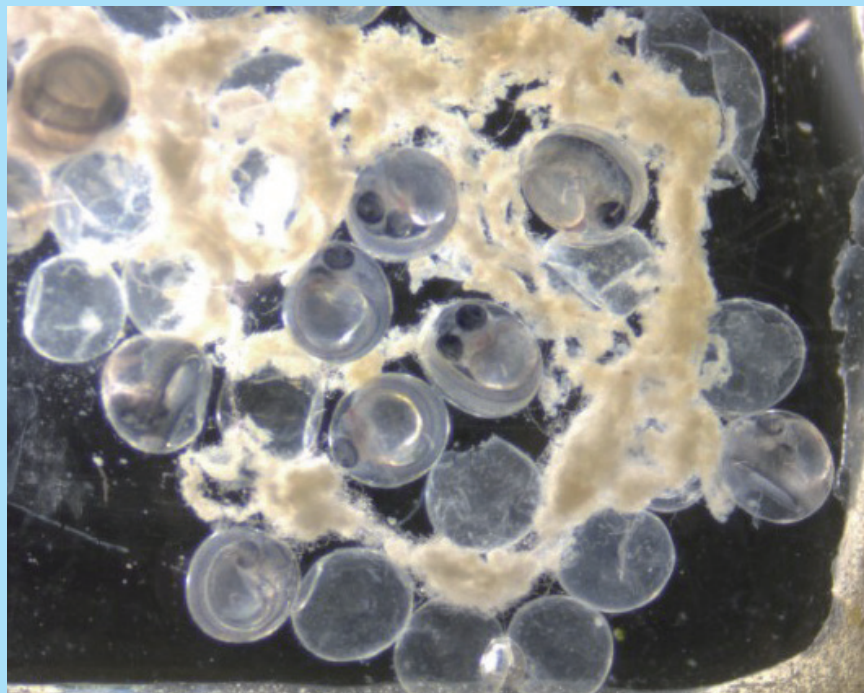
こうしたなかで、今年九月、養殖業に明るいニュースが出現した。

何と、養殖というイメージには程遠いと思われるサンマの養殖に成功したというニュースである。

大手水産業のマルハニチロ株式会社が、養殖研究を行うグループ会社のマルハニチロ養殖技術開発センタ



開発センターの陸上水槽で飼育試験中のサンマ（マルハニチロ提供）・・・福島民報2025.9.10



ふくしま海洋科学館から輸送したサンマ卵
・・・マルハニチロ 2025.9.9

卵からの完全養殖

しかも、『世界で初めてのサンマの水槽内繁殖』を成功させた「公益財団法人ふくしま海洋科学館」の高い飼育技術の支援を受けたマルハニチロ養殖技術開発センターが、同館よりサンマ卵の提供を受け、二〇二三年十月にサンマ養殖の研究に着手してからの成功ですごいスピードだった。

さらに、サンマの卵を出荷目安である百グラムを超える成魚まで育てたのだが、同社によると、これも『世界初』という。

これはいわば、卵の状態からの「完全養殖」である。日本の水産業の底力を見せつけたニュースであった。

福島の水族館は今後の養殖業の中心に！

筆者は、このニュースからもうひとつの興味深い事実を掘り起こしたい。

福島県いわき市にある「公益財団法人ふくしま海洋科学館」とは、簡単に言えば「水族館」である。

このサンマの完全養殖成功において、わが東北の福島県の「水族館」が大きな役割を担っていたことにもっと注目して欲しいのだ。

原発事故から十五年を迎えようとしているときに出現したビッグニュースに心から賛辞を送りたいし、高い魚飼育技術をサンマ以外にも拡大して、今後の養殖業の中心になって欲しい。

温泉総選挙に見る東北の温泉

温泉総選挙の結果発表

「温泉総選挙二〇二五」の結果が、一月五日に発表された。温泉総選挙というのは、二〇一六年に始まった環境省・内閣府・総務省・経済産業省、観光庁の五つの省庁が後援して実施されている国民参加型の温泉地活性化プロジェクトである。「温泉で元気に！温泉を元気に！」が合言葉で、エントリーされた温泉地について、国民からの応援投票の結果によるランキングにして発表、各温泉地が取り組んでいる内容について、各省庁から賞を授与するなど、温泉地の活性化につながる企画や仕組みづくりを官民一体で毎年実施してきている。

今年の温泉総選挙の投票は八月八日から一〇月三十一日まで行われ、投票総数は七四三二四票に達した。ランキングは、「絶景」「美肌」「秘湯／名湯」「レジャー／街ぶら」「湯治ウェルネス」「歴史／文化」「健康／ス

執筆者紹介

大友浩平
（おおもともこうへい）
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
<http://blog.livedoor.jp/anagma5/>



Facebook
<https://www.facebook.com/kouhei.ootomo>

だろう。

鳴子温泉郷は東北を代表する温泉地の一つと言え、江合川の上流沿いに点在する川渡温泉、東鳴子温泉、鳴子温泉、中山平温泉、鬼首温泉という五つの温泉地からなる一大温泉地域である。それぞれの温泉地の特徴があり、また合わせておよそ四〇〇もの源泉があつて日本の温泉の二の泉質分類のうち八種の温泉が存在するという多様さが、自身の状況に合わせた湯治を可能にするところが評価されたものと思われる。

肘折温泉郷は、開湯一二〇〇年という長い歴史を持ち、現在も東北に特に顕著な湯治文化を色濃く残す温泉地である。阿蘇山などと同じくカルデラ地形の中にあり、東北屈指の豪雪地帯としても知られる。昔ながらの湯治メインの歴史ある宿が狭い道の両側に立ち並び、その温泉街の景色は郷愁を感じさせる。実は最近ちょうど宿泊してきたが、温泉の質もよく、静かでのんびりできる雰囲気はまさに湯治にはピッタリであった。自炊しながら長逗留する人が多いのも頷ける。

なお、エリアごとの部門ランキングを見ることができ、東北エリアでは「絶景」部門の第一位が岩手県普代村の国民宿舎くろさき荘が、「秘湯／名湯」部門の第一位に宮城県加美町の陶芸の里ゆーらんどが、「健康スポーツ」部門の第一位に山形県東

根市のさくらんぼ東根温泉が、第二位に秋田県三種町の砂丘温泉ゆめろんがランキングしている。

もう一つの総選挙も

ちよつとややこしいのだが、この温泉総選挙と同時に実施されているものに「温泉宿・ホテル総選挙二〇二五」がある。温泉宿・ホテル総選挙とは、日本全国の温泉のある宿・ホテルを活性化するための応援投票企画サイトで、いわば「温泉総選挙」の宿・ホテル版である。こちらは今年で五年目、こちらも温泉総選挙と同じ時期に投票が実施され、こちらの投票総数は四一九〇七票であつた。

ややこしいと言つたのは、「温泉総選挙」でも東北エリアの「絶景」部門第一位が国民宿舎くろさき荘となつていることから分かるように、一軒宿の温泉の場合はそのまま宿名イコール温泉となる例が多々あることである。ただ、あくまでも「温泉総選挙」は温泉全体が投票対象で、こちらの「温泉宿・ホテル総選挙」は個別の宿・ホテルが投票対象となつている。

こちらの部門はさらに細分化されており、「料理自慢」「絶景」「おもてなし」「泉質自慢」「レトロ」「ファミリー」「ラグジュアリー」「ペット同伴」「湯治ウェルネス」「健康／スポーツ」「美肌」「秘湯宿」「お気軽／お得」「二人旅」「アウトドア」となつている。

東北の宿では、「絶景」部門で岩手県大船渡市の大船渡温泉（という名前の一軒宿である）が並み居る全国の宿を抑えて堂々の第一位となり、「ラグジュアリー」部門の

第三位にスパリゾートハワイアンズのモノリスタワーがランクイン、「健康／スポーツ」部門の第二位に同じくスパリゾートハワイアンズのホテルハワイアンズがランクインした。また、「お気軽／お得」部門の第五位に亀の井ホテル青森まかどが、「アウトドア」部門の第二位にスパリゾートハワイアンズ系列のハワイアンズグランピングマウナヴィレッジがランクインした。

大船渡温泉は、東日本大震災の三年後の二〇一四年に開業した、三陸の復興を物語る宿である。地元の一入の漁師の「お腹いっぱい食べてほしい、温かい風呂に足を伸ばして入ってほしい」という願いから生まれた宿である。従つて、誇るべきは宿から見下ろす三陸海岸の絶景だけではなく、宿で提供される「漁師めし」でもある。

スパリゾートハワイアンズのモノリスタワーには、これまたちょうど最近宿泊したが、敷地内に三つあるホテルの中でも確かに最もラグジュアリーな雰囲気があり、かつそれだけでなくハワイの自然や文化を感じられるアートが飾られて、ハワイの雰囲気をうまく活かしたリゾートホテルであつた。温泉



落ち着いた佇まいの肘折温泉郷



ラグジュアリー感のあるモノリスタワー

が源泉かけ流しであるのもここだけであり、温泉自体を堪能するにも最適である。

やはり情報発信が足りない

ところで、一二年前に発行された本紙の第八号で東北の温泉について取り上げたことがあり、その中で東北の温泉の多さについても各種データから示している。当時のデータで全国に三二八五ある温泉のうち東北圏にはその四分の一に当たる七六七の温泉があること、国指定の国民保養温泉地九一のうち二二が東北圏にあること、松田忠徳氏が著書で取り上げた全国二二七の温泉のうち三分の一の六九の温泉が東北圏の温泉であること、日本秘湯

を守る会の一八八の宿のうち七七が東北圏の宿であることなどを紹介した。

そうした温泉の多さの割に、今回のこの温泉総選挙、温泉宿・ホテル総選挙の結果を見ると、ランキングしている温泉、温泉宿の数が少ないというのが、私の率直な感想である。それもそのはずで、この温泉総選挙も、温泉宿・ホテル総選挙も、全国にある全ての温泉地、全ての温泉宿から投票する仕組みにはなっていないのである。

具体的には、まず投票に先立つて七月一日から八月一日までが温泉地、温泉宿のエントリー期間となっており、その一ヶ月の間にエントリーした温泉地、温泉宿の中から応援したい温泉地、温泉宿を選んで投票する、と

いう仕組みが取られている。従つて、エントリーしていない温泉地や温泉宿はそもそも投票の対象にはなっていないわけである。

東北の温泉地、温泉宿で選ばれているところが少ないのは、ここに原因がある。エリア別のランキングを見るとよく分かるが、東北エリアのランキングはそもそも数が少ない。部門によつては対象となる温泉地、温泉宿がない部門も多くある。つまり、これら総選挙にエントリーする温泉地、温泉宿が東北では他地域に比べて少ないために、選ばれる数も当然少ないわけである。

新聞やテレビなどマスメディアでも取り上げられるこれらのランキングは一定程度、訪れる温泉地や温泉

宿を選ぶ際に影響を与えていると思われる。せつかくいい温泉が多くある東北で、それをPRするいい機会なのにも関わらず、そもそもそれを活用しない温泉地、温泉宿が多くあるのは実にもつたいないことである。ここにも東北でよく指摘される情報発信の不十分さが見えるのではないだろうか。

いいものは何も言わなくても分かつてもらえる、と相手に期待するのではなく、いいものはいいと自分たちで一生懸命伝えようとする、これこそが私たち東北人に最も求められていることだと思ふ。来年の温泉総選挙ではもつとたくさんさんの温泉地、温泉宿がランキングしているといいなと思ふ。

その一杯に、東北の全てを込めて― 「風の谷」で芋を煮るといふ事

ここ数年、私は「毎秋」ほぼ二度だけであるが、芋煮汁というものを戴く機会を逃さぬようにしている。

一度目は、仙台における長年の仲間たち（音楽関連で、今は無きアイリッシュパブの元店長や常連客ら中心）と、仙台北部の象徴・泉ヶ岳の、冬はスキー場となる高原施設において。そして二度目は、郷里・山形県の庄内に帰省した際である。何故違う場所ですら芋煮を戴くか―理由は少なくとも二つある。一つは、仲間らと共に食した後は、家族と食したくなるという事。そして二つは、一度目と二度目が「異なる具材・味付け」である事だ。

東京などに出て、夏や正



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かって立ち読みを始め、東北好きである。

行うというところだろう。

しかし同じ山形県でも日本海側の庄内出身である私は事ある毎に説明の必要を

迫られる―庄内は宮城県側同様、豚肉で味噌味付けなのである、と。何故、その

ような地域での違いが生まれたかについては、その地

域の産物が関係しており、牛肉を産する所ではそれに

合う醤油味が、豚肉を産する所ではそれに合う味噌味が、更に宮城であれば仙

台味噌という懐刀もあって定着した―などの答に落ち

着くのであると思う。

しかし近年は宮城県そして郷・庄内でも山形内陸式

の一種贅沢な美味しさが認知されて、急速に「牛肉・

醤油味」が広まりつつあるようである。事実、泉ヶ岳

で仲間らと作るのもここ数年ずつこの山形内陸式で

あり、憎越ながら山形県人代表として私が味の最終的

調整をさせて頂き好評であった（と言っても庄内人な

のであるが・）。牛肉を用いて醤油・砂糖・酒など

で味付けすれば、確かにすき焼きの汁物版といった趣

で病みつきになる事間違いない。「只の豚汁ではない

か」とよく揶揄される豚肉・味噌味が駆逐されがち

になるのも尤もな気がしないでもない。しかしながら

その後私が帰省して家族にリクエストするのが他なら

ぬこの庄内式なのである。やはり、いくら他地域の

ものが良いと思っても、地

元に根付いたものはアイデンティティの拠り所として譲れないのかも知れない。

山形内陸式がたまにする贅沢であるとすれば、宮城

式そして庄内式はほとつる、毎日でも食べたい庶民

的味わいと言えるだろう。むしろ、牛肉・醤油味で

育ちその至高を疑わない山形内陸の人々より、両方

の良さを知っている庄内や宮城の人々の方が感覚として

は得をしているのではないかと―と思えなくもない。

しかし東北の民族食、など書きつつも実際には青

森県や秋田県ではほとんど聞かれないともい、岩手

・福島でも形を変えながら存在するも地域的にも限定

的なものであるとの事から決して東北全土的なアイデ

ンティティの象徴と言えるものではないようだ。

一方で東北から一歩離れた新潟や関東北部、はたま

た近年ではオランダやフランスといった欧州にまで、

現地の東北県人会によるイベントという形で知られざ

る広がりを見せるという芋煮は、納豆汁のようなイン

パクトある独自性とは異なる、国内外に広く受け入れ

られる普遍的な日本食の美味しさと栄養価を備えた万

能料理と言えるだろう。その起源にはいくつかの

説がある。その一つとして江戸期、やはりその発祥

は現在の山形県、最上川流域であるとするものだ。

当時上方との日本海交易で栄えた最上川舟運、特にその終点である現・中山町

長崎において舟の船頭らが荷受人の到着を何日も待た

される事からの退屈凌ぎにと河原にて催していた鍋を

囲んだ宴会、これが芋煮の始まりだというのである。

牛肉を用いるのは昭和初期からで、当初は積み荷で

ある棒タラや川魚を里芋とともに煮込んだとの事。岩

手の遠野物語、その温泉となった物語文化がかつての

沿岸と内陸の交易、その要衝としての繁栄から生まれ

た事を思えば、一時代における独自の繁栄と賑わいが

他地域にない文化を築かせたという話は納得のいくと

ころだ。他にも同江戸期に山形に移住した近江商人が

京料理「芋棒」を元に里芋と鰯を煮たという話やその

後明治期に都市部で「野掛け」と呼ばれる野外での芋

煮が始まって兵士や学生ので広まり、商談や見合いの

場にもなるなどして定着していった話が聞かれる。

しかしそれ以前に、里芋を汁物にして鍋を囲む文化

は無かったのか―というところでも東南アジア原産の

タロイモ類の中では北方性である里芋は、縄文時代後

期に日本列島へ伝来し稲作以前の主食の一つとして重

要な位置づけであった。熱さと湿気に強く乾燥に弱い

性質を持ち、栽培の適地は秋田・岩手以南である事か

らすると、東北の芋煮文化

はその作付の分布的には北限であった事になる。

里芋が、深鉢型の縄文土器による煮炊きにも最適と

言われる事からも、調理法としての芋煮が日本民族の

黎明期とともにあった可能性は高いだろう。明治期に

都市部の河原で誰かが始めたという「野掛け」こそ、

縄文時代からの野外での、家族や仲間らと鍋を囲んで

の芋煮の姿と同一のものである事を思えば、山形人は

おそらく意識せずして縄文を現生活上に再現し、また

少し前のキャンプブームなどより以前に、「いつでも

戻っていく事ができる」人間本来の野生の力、その少

なくとも端緒となり得るサバイバル感覚を培い続けて

いるという事もできるかも知れない。そう考えると今

や国内有数の大都市と目される仙台の河原において芋

煮会の伝統が廃れる事なく受け継がれている事は世界

的な驚異の視線を浴びる資格を持たぬとも言えまい。

その調理法・内容のみならず、鍋を囲む人々の親睦

を深めるという、人間社会を円滑に回し進展させるコ

ミュニケーション機能を伴っている事も今更触れるま

でもなく、これもまた古代からの収穫祭の感覚を遺伝

子レベルで引き継いだ、食の原風景たる芋煮の側面と

言えるだろう。只、これが冒頭でも触れ

たように、付き合いたくも

ない他人と接しなければならぬという交流のお仕着

せという場面を体験した人もおそらく少なくなく、近

年は特にそうした声を無視せず敏感に対応する空気も

あって、所謂飲み会や忘年会などと同様、減少傾向と

なるのは止む無しというところがあるかも知れない。

むしろ、独りで料理し独りで楽しむ芋煮があっても

良いのではないかと―そのように思う人もいるだろうし

私自身も、芋煮にはそれだけの価値があると考える。

しかし例えば初日の出というものが、日の出そのもの

は毎日見るものと同じはずなのに、わざわざ見に行くのは一緒にそれを見る人

の反応や笑顔を確認して幸せを感じる為でもあり、つ

まり何を見るのかよりも誰と見るのが大切なのだ―

という話を思い出せば、芋煮もまた、何を食べるか以

上に、誰と食べるかという事なのかも知れない。とは

言え、かつて商談や見合いの場ともなっていた時代を

見習い、現在の急速な人口減少を食い止める為にも積

極的に芋煮会を出会いの場に―などと淡い期待を抱く

程、私も楽天的ではない。打算的な思惑は、芋煮を

不味いものにするに違いない―只々純粹に、その香りと風味、家族友人の笑顔・

対話を楽しむ事だ。そんな中から自然に商談や面白い

企画の話が生まれては進みまた友情なり恋愛なりも育

まれる事があるだろう。そうは言っても、

現在こそ巨大ショベルカーと巨大鍋を使

った大掛かりな芋煮イベントを展開し話

題を搔つ攫う山形県が、果たしていつま

でその芋煮全盛期を謳歌できるのか―こ

うした催しの場は山形市などの都市部だが、そ

の大鍋の豊富な具材を生むのは、今まさに人を失

い、疲弊しつつある田園地帯なのだ。

今年の話題の書『風の谷』という希望（英治出版）の帯にも、「このまま

では歴史ある自然豊かな土地が打ち捨てられ、都

市にしか住めない未来がやってくる・・・」とあ

る。著者である富山県出身の情報科学者・安宅和人氏

は、そのような未来は受け入れられぬとして、都市を

否定はせずとも、非都市領域である「疎空間」にもテ

クノロジーと知恵を以って都市同様の情報と創造

の行き交う社会を作り出し、多様なアイディアや活

動力を持った人材が交流しそこを拠点に置きたい

と望む場所―「リゾートのような一時的な滞在地」でも、「国立公園のような保

護区」でもない、人間が真に自然と一体になって生

きる事ができる「風の谷」に抱かれた列島世界を構

想、各方面の情報と知識を



今秋、帰省時に戴いた庄内式芋煮汁

総動員して実現すべく動き出した、その数年の成果と、未来の後継に向けた啓蒙の書と言えよう。これまでも巨大都市への反抗として幾度も語られてきた理想主義的計画のようにも思えるが、地方出身の若い世代にも影響力のある科学者・思想家である著者が、切迫しつつある社会情勢の中、かつてない「非都市」に向けた本格的な改革その実現の為に提案を行い多くの人の賛同や意見を集めている点は注目すべき事と考えるところである。

※

当然の事ながら、人間が都市だけに住む世界では芋煮会は開催できず、無理に企画してもそれは歪なものになるだろう。都市が「疎空間」の為に少しずつでも形を変え、むしろ先進地域として充実してゆく非都市領域全土で芋煮会が繰り広げられる東北こそが、まさに理想たる「風の谷」として目指されるに違いない。



雪の境内



朝焼け



雪降り仕事にならないサギ仲間



冬季のカラス



雪景色

シリーズ 遠野の自然
「遠野の大雪」
遠野1000景より

例年のことながら、早いもので、今年も残り半月となった。あつという間の一年だったような気がする。他方で、あまりにも暑すぎて長く続いたあの夏の喧騒もずっと遠い昔の話のようにも感じられ、長い一年

だったという気もする。よく言われるが、暑すぎる夏には厳しい冬がつきものというが、このところの寒波でこれからどんどん寒くなり、雪もたくさん降るのだろうか？
そして、師走の何かと忙

しいところに青森の八戸沖を震源とする大地震が発生した。余震も続いている。東北では東日本大震災の記憶はまだ生々しく残っている。不気味な感じがする。



センブリ



石塔群



陰陽石

シリーズ【東北を再発見する旅】…^{②4}「小牧野遺跡」（青森市） かなりの高台にあった遺跡で宗教儀式を行った場所ではないか？



小牧野の森 ドングリの家



環状列石遠景



二本の巨石柱



太陽の動きと環状列石の関係図

青森の小牧野遺跡訪問
青森県青森市にある「小牧野遺跡」を訪問したのは今から九年前の九月初めだった。
そのとき、岩手、青森、北海道に存在する縄文遺跡のうち、特徴のある縄文遺跡を三泊四日の弾丸ツアーで出来るだけ多く廻ろうと急に思い立ったのだ。
そして、例の如く、新幹線等を使って最寄りの駅まで行って、そこで降り、レンタカーを借りて、猛烈なスケジュールで遺跡巡りを敢行するのだが、その旅の途中に立ち寄った遺跡だった。なぜそこを選んだかといえば、そこに環状列石があることを前から知っていて、このツアーでどうしても見たくなったためだ。
環状列石といえば秋田の「大湯環状列石」が有名だ

かなりの高台にある が宗教的な場所？

し、すでに見ていたが、他の環状列石もどうしても見たかったし、比較してみたかったのだ。
受付で熊鈴を渡された
受付の建物があったので、料金を支払い、いざ見学と思ったら、受付の女性からいきなり熊鈴を渡された。そしてこれもなげに「昨日ここに熊が出たので熊鈴を身につけてください」と言われた。
今ならば、熊出没もめずらしいことではないかもしれないが、九年前のことでも驚いた。
縄文遺跡と熊の組合せは意外過ぎた。とはいえ、幸いなことに見学者は筆者一人ではなかったので少し安心した。

この遺跡はかなりの高台にあった。青森平野を一望できる高台にあり、標高は百四十五メートルである。なぜこんな高いところに遺跡があるかと思ったが、いろいろ考えてみた。
縄文時代の最も温暖な時代には、今よりも数メートルくらいまで海水面が高かった「縄文海進」があった。しかし、これだけでは高台にあることの説明にはならない。
日常生活とは異なる、何か宗教的な場所だったから高台になったのではないかと考えた。

襲って来て、めまいがした。縄文時代をリアルに感じることが出来るのはきつこうしたことになるだろうと思った。
環状列石に用いる石を運ぶエネルギー
この環状列石を形成するのに何個の石が必要なのかは分からないが、すぐ近くにあるわけではなく、丘を降りた場所にある石を運んだようだ。
巨石柱も何本かあるので、それも運んだのだ。地中に埋まっている部分も含めると百キロどころか二百キロはあるかという巨石である。いったいどうやって運んだのだろう。
また、そのエネルギーはどこから来たのか？
強制されたわけではなさそうなので、自ら進んで運んだようだし、おそらくは宗教的な情念で運んだとした



一本の巨石柱

か考えられない。
太陽運行と環状列石
帰りに受付場所にある何枚もの写真を見た。
そのなかに、太陽の一年の運行とそれぞれの環状列石を配置した地図があった。それを見ると、やはり環

状列石は太陽の運行と深く関連しているだろうと推測できた。
そもその話、筆者が考える環状列石とは、地球のミニ寒冷化と深い関係があると考えている。
温暖化の縄文時代からミニ寒冷化に移行する当時の



高台の遺跡から見える遠くの景色

縄文人からすれば、太陽が弱ったせいでミニ寒冷化は起きることであり、その太陽が元気になるように願ったのだろうか？
また、そこにあるいくつかの小さな環状列石の下にはきつと人間が埋葬されているだろうし、そのことは

やはり太陽運行と関連があるのだろうが、筆者にはよく分からなかった。
とにかく、この遺跡は縄文時代にタイムトリップをさせてくれる遺跡であることは確かである。



写真で
お伝えする
東北の風景

「東北の師走」

写真撮影
尾崎匠

